

## 日中の「一」における有界性機能の一考察

王蓓淳/ Wang, Pei-tsuen

開南大學應用華語系&應用日語系 助理教授

Department of Applied Chinese & Applied Japanese, Kainan University

### 【摘要】

本論文從對比研究的觀點出發，針對中日兩語言「一」的有界性機能進行研究。我們認為傳統的單一「有界性」概念並不足以解釋日語的「一」和中文的“一”的功能，在本文中我們將「詞彙層面的有界性」與「事態層面的有界性」兩種不同層面的「有界性」概念導入中文和日語進行分析。研究結果認為日語的「一」屬於詞彙層面的時體要素，與動詞以及名詞等要素結合時，給予事件在展開時的明確終點，進而表現一個「時體上的界限」；而中文“一”的有界性則與事件的開展無關，中文的“一”代表的是事態層面的有界性，說話者藉由“一”賦予事物具體輪廓，讓事物成為一個可認知的「個體」，進而表現有界的概念。

### 【關鍵詞】

「一」，詞彙層面的有界性，事態層面的有界性，時體，個別性

### 【Abstract】

This paper discusses "one" in Chinese and Japanese with the concept of "boundedness". We propose "lexical boundedness" and "event boundedness" to explain Japanese and the Chinese "one". "One" in Japanese is an aspect element in the lexical level. When combined with elements such as verbs and nouns, it gives an event a clear end point, expressing a "aspectual boundedness". On the other hand, Chinese "one" has nothing to do with the concept of time. Chinese "one" which has the individualization function expresses an "event boundedness" by give things a specific outline.

**【Keywords】**

One, lexical boundedness, event boundedness, aspect, individualization

## 1. 有界性

世の中の事物には、明確な境界があるものとないものがある。たとえば、water はそれ自体ではどこからどこまでが水であるという境界を持たず、無界 (unbounded) と呼ばれるのに対して、a lake (湖) はそれ自体で境界を持つと認識され、有界 (bounded) と呼ばれている (Langacker1991)。このような有界性の認識は言語の仕組みにも関係している。従来の研究では、英語に比べて日本語は有界性の弱い言語とされている (池上 1989、池上 1995、Kageyama2001 など)。その理由としてよく指摘されるのは、日本語の名詞に可算と不可算の区別がないということである。たとえば、日本語では「星を見た」、「花が咲いている」、「水をください」でいう「星」、「花」、「水」は同じ形で表現され、不定冠詞 “a” や複数形を示す接尾辞の “-s” に当たる要素が統語上に反映されていない。一方、同じことを英語で表現するのであれば、I saw a star last night や Flowers are blooming、Can I have some water と言うなど、可算名詞と不可算名詞の区別を明確にしなければならない。このことは、日本語の言語表現のレベルにおいては、あらゆる名詞が英語の不可算名詞のイメージで扱われていることを表し、名詞の有界性が英語に比べて弱いことを示している (池上 1989、Kageyama2001、石田 2002 など)。また、名詞のほかに、日本語の有界性の弱さは動詞レベルにおいても並行的に見られると池上 (1989、1995) は論じている。たとえば、英語では動詞 burn は火をつける動作から、対象物が燃えるという結果までが動詞の意味範囲に含まれており、(1a) のようにその結果をキャンセルすることができないが、日本語の「燃やす」は火をつけるという動作のみに着目し、実際にその対象物が燃えたという動作の結果が必ずしも含意されるわけではない。よって、(1b) に示す結果キャンセル文は日本語では成立する。(2b) に示す「沸かしたけれど、沸かなかった」も、対応する英語は文として不適格であるが、その日本語に不自然なところはない<sup>1</sup>。これらの例文は、英語は動詞の意味範囲中に行為の結果が含まれ、有界的であるが、日本語は動詞が表す行為の範囲が定まらず、有界性が弱いことを示している (池上 1989、

<sup>1</sup> 例文 1 と例文 2 は池上の《「する」と「なる」の言語学》と《「英文法」を考える》から引用したものである。

池上 1995 など)。

- (1) a. \*I burned it, but it didn' t burn.  
 b. 燃やしたけど、燃えなかった。  
 (2) a. \*I boiled water, but it didn't boil.  
 b. お湯を沸かしたけれど、沸かなかった。

そこで、日本語の有界性の弱さを補うマーカーの一つとして「一」が用いられる(北原 1999、Kageyama2001、由本、伊藤、杉岡 2015 など)。(3a)の「泳ぐ」は継続可能な非有界動詞として「～続ける」と結合することができるが、「一」が付くことによって動作に明確な到着点をもたらされ、(3b)のように「～続ける」との結合が容認されなくなる。また、「酒」は液体で無界であるが、(4)に示すように「一」が付加されるとその境界が定められ、有界的な表現となる<sup>2</sup>。「一」はモノやコトに対して有界性を明示的に与える役割を果たしているとされている(池上 1989、Kageyama2001、由本等 2015 など)。

- (3) a. 花子は泳ぎ続けた。  
 b. \*花子は一泳ぎし続ける。  
 (4) 彼は小舟の中へパンと一瓶の葡萄酒を入れた。

対照研究の観点から中国語に目を向けると、日本語と同様に有界性が低いとされる中国語においては、“一”もモノやコトに有界性を付与する機能を持つと論じられている<sup>3</sup>。沈(1995、2004)の分析では、動詞“坐”は元々非有界的動作を表すが、“一”がつくことで、その動作に明確な到着点をもたらされ、(5)に示すようにその動作が瞬間的に終結または出現することを表し、有界的な動作になる。それと同様に、名詞“水”は無界であるが、(6)に示すように“一桶(バケツ一杯)”が付くことによって、

<sup>2</sup> 日本語は類別詞言語である。数量を表す場合は数詞に類別詞または計量詞を付けて用いるのが一般的である。

<sup>3</sup> 日中両言語における「一」を区別するため、本稿では日本語の「一」を鍵括弧、中国語の“一”をダブルクォーテーションマークで囲むことにする。

明確な境界が付与され、有界のモノになる。

- (5) 這位老道進到屋裡，往那這麼一坐。 (沈 2004:372)

(この年を取った修道者は部屋に入ってそこに座った)

- (6) 既然她要留在家裡，就叫她先幫我到河邊提一桶水回來。

(彼女がこの家に残りたいのであれば、まずバケツ一杯の水を川から汲んできてくれ)

(4)の「一瓶の葡萄酒」と(6)の“一桶水”に示したように、モノの有界化において日本語の「一」と中国語の“一”は確かに共通な意味機能を持つと見ることができる。しかし、以下の例文に示すように、動詞または名詞と結合した日本語の「一」と中国語の“一”に意味機能の違いが見られる現象が散見される。(7a)の「一走り」や(8a)の「一足」において、対応する中国語は文として不適格であるが、その日本語に不自然なところはない。この言語事実は、日本語の「一」と中国語の“一”における有界性機能の性質が異なることを示唆している<sup>4</sup>。

- (7) a. 一走りしてから仕事に行きます。

b. \*一跑再去上班。

- (8) a. 駅まではあと一足だ。

b. \*離車站只要再一腳。

本稿では「一走り」と“一跑”、「一足」と“一腳”のように、動詞または名詞に付く日本語の「一」と中国語の“一”に対象を絞って分析を行う。日本語の「一」と中国語の“一”における有界性は同様な概念ではないことを論じたうえで、それに代わる概念として「アスペクチュアルな限界付け」と「事態の限界付け」という多層的な有界性概念を提案

<sup>4</sup> 日本語には「漢語系数詞(イチ、ニ、サン…)」と「和語系数詞(ひと、ふた、み…)」がある。王(2019)は事態叙述という観点から単純に数情報を表さない「一」を考察し、「一足」、「一雨」でいう「ひと」は「事象描写」、「一会社員として」、「一母親として」でいう「イチ」は「属性描写」に用いられると分析している。本稿では王(2019)と同じ立場を取り、事象を表す「ひと」を対象に絞ってその有界性機能を考察する。

する。「アスペクチュアルな限界付け」と「事態の限界付け」の導入によって日中両言語における「一」に関わる表現に統一的な説明を与えられることを示す。

以下、2 節では日本語の「一」または中国語の“一”に関する先行研究を整理し、本稿の提案を示す。3 節では様々な言語事実を考察することによって日本語の「一」と中国語の“一”における有界性の違いを裏付けていく。本稿が提案した「アスペクチュアルな限界付け」と「事態の限界付け」という多層的な有界性の観点から、日本語と中国語の事例の説明を試みる。最後は 4 節で本稿のまとめを述べる。

## 2. 先行研究の分析と本稿の提案

日本語の「一」に関する先行研究は、「一」を動詞のアスペクト研究の一環として分析することが多い。影山(1996)の分析によれば、「一」はアスペクト素性として、継続可能な活動動詞に付加して事象に有界性([+bounded])を与える役割を果たしている。以下の例文に示すように、活動動詞「走る」、「働く」、「休む」、「泳ぐ」、「眠る」や「遊ぶ」などに「一」が付加されると、動詞が表す動作の展開における限界点がもたらされ、有界的な事象となり、「少し、ちょっと」という意味を与えられる。

- (9) a. 軽いカゼの引き初めは熱いウドンを一杯すするか、その辺を一走りして汗をかけば治るかもしれないが、軽いと思っていたカゼがそうではなくて、こじらせて肺炎にならないとも限らない。
- b. 一働きして、ベッドに横になっていたら眠ってしまい、気づけば 14 時でした。
- c. 台北市内のカフェで一休みしてみました。
- d. 家の庭にプールがあったら、一泳ぎしてから出社したり、暑い時ザブンと飛び込んでから眠ったりできるな。
- e. 今日は仕事を休んで、一眠りしたら、病院に連れて行こうと決めた。
- f. 早く食べ終わったグループは、ゲームセンターで一遊びして戻ってきたようです。

由本等(2015)は影山(1996)と同様に、「一」は動詞が表す事象に有界性を付与するという立場をとるが、以下に示すように「一」は継続可能な活動動詞以外の動詞タイプとも結合できると指摘し、影山(1996)の主張を修正した。

- (10) a. ゆでたじゃがいもを軽く一潰した。 (由本等 2015:437)  
b. シチューをもう一温めする。 (ibid., pp. 437)  
c. ビールを冷蔵庫で一冷やしする。 (ibid., pp. 437)  
d. 飲み終わったら用意された濡茶巾で飲み口を清める。茶碗を畳の上に置き、左手を添えて、飲み口を左から右へ、濡茶巾を一折りし、今度は右から左へ。濡茶巾をもうひと折りし、最後にもう一度左から右へ拭き、たたんで茶巾入れへ。

さらに、由本等(2015)は、具体物を表す名詞に「一」が付加することがあることを指摘している。その場合においても「一」は具体物が表す事象に対して限界点を付与し、事象の有界性を確定する役割を果たしているとされている。たとえば、(11)の「一刷毛」では「一」が付くことによって、「刷毛を使ってマニキュアを塗る」という事象に対して区切れが付与され、「刷毛を使ってマニキュアを少し塗る」という意味解釈となる。

- (11) 爪の先にベースコートを一刷毛塗ります。こうすることでマニキュアのもちが断然よくなります。

以上に示した先行研究をまとめると、日本語の「一」は付加する要素が表す事象における限界点を表し、その事象を有界的なものに変更する機能を担うことが分かる。また、(12)のパラフレーズにも見られるように、動詞に「一」が付くと、「テイル」との結合ができなくなる。「一」はアスペクト素性として、結合する要素が語彙的に含まれるアスペクチュアルな値を変更する役割を果たしていることが明らかである。本稿では、「一」の有界性は語彙的レベルの対立として位置づけられており、日

本語動詞研究における限界性[+/-telic]に共通するものだと考える<sup>5</sup>。

- (12) a. 泳いでいる/\*一泳ぎしている  
 b. 走っている/\*一走りしている  
 c. 働いている/\*一働きしている

一方、中国語の“一”でいう有界性は、日本語の「一」とは異質なものと考えられる。(13)の例を見てみよう。「一」が付くことによって動詞「走る」に限界点が付与され、「一走り」は「少し走る」という意味解釈として有界的コトを表す。そこで、(13a)の「走る」は主節として表される事象(「仕事に行く」)と時間的継起関係にある。「走る」という事象が完了した後に、次の動作(「仕事に行く」)が行われるという解釈である。中国語では、(13c)に示すように“一”は「一」と同様に後接する動詞に対して「ちょっと、少し」という意味を付加し、“跑”が表すコトに限界点を与えるが、(13a)に対応すると思われる(13b)の“一跑再去上班”は文として不適格である。動詞に“一”が付く場合は、(13c)の“一跑就頭暈”に示すように、“一跑”は具体的なコトとして、主節に表される事象(“頭暈”)の実現のされ方を限定する。

- (13) a. 一走りしてから仕事に行きます。  
 b. \*一跑再去上班。(ちょっと走ってから出社する)  
 c. 一跑就頭暈。(ちょっと走ったらめまいがする)

このような“一”の特徴は、大河内(1997)が指摘する“一”の個体化機能につながっていると考えられる。大河内(1997)は、“一”は名詞に個別の概念を与え、抽象的なモノを具体化するという個体化機能を持つと論じている。(14a)のように“一”が付かない名詞は個体化されない、一

<sup>5</sup> 従来の研究では、動詞文が表す動作、事態の終結に関する研究は、「限界性(telicity)」という観点から説明されることが多い。限界性は動詞分類の基準として用いられてきた。しかし、後述するような、「最後の一口」、「次の一足」、「出かけ前の一刷毛」など、名詞の性質が限界性に関与する現象には適用できない。影山(1996)は有界性という概念を動詞や名詞といった品詞を超越した一般的な概念として捉えている。本稿では影山(1996)、由本等(2015)と同じ立場を取り、「有界性」という観点から日本語の「一」を分析する。

種の抽象概念としてしか捉えられていないが、“一”を付けられると、(14b)に示すように名詞に明確な輪郭が与えられ、その人物の持つ具体性が表される。また、(14c)に示すように、名詞に“一”が付けられた場合、“一”が付いた名詞は現実の存在として明確な輪郭を持つので、その名詞を中心に話が後に展開することが多いと指摘されている。

- (14) a. 她是學生。 (彼女は学生である)  
b. 她是一個聰明的學生。 (彼女は賢い学生である)  
c. 她是一個學生，今年正在讀高二。  
(彼女は学生で、今年高2である)

大河内(1997)は“一”が名詞に付く場合のみを考察対象とするが、(15)に見られるように、“一”が動詞と結合する場合においても、話が後に展開するという表現がほとんどである。たとえば、(15a)では走ることが“頭暈(めまいがする)”を引き起こす。(15b)では食べることが“吐(吐く)”を表す。(15c)の“工作(働く)”と(15d)の“喝(飲む)”もそれぞれ“肚子痛(お腹が痛い)”と“臉紅(顔が赤くなる)”の原因となるコトを表す。つまり、名詞に“一”が付く場合(14c)と同様に、動詞に“一”が付く場合においては、“一”は動詞が表すコトに対して明確な輪郭を与え、そのコトを具体化する機能を持つ。(15)の“一跑”、“一吃”、“一工作”などは具体的なコトとして、主節として表される事象の状況生起時のコトとして位置づけられ、主節として表される事象の実現のされ方を限定・修飾する。つまり、中国語の“一”で言う有界性は結合する要素が表す事象のアスペクチュアルな値を変更するより、結合する要素が表すコトに明確な輪郭を与え、そのコトを実体化する機能を持つと考えられる。

- (15) a. 一跑就頭暈。 (ちょっと走ったらめまいがする)  
b. 杏鮑菇卡食道，7旬翁一吃就吐。  
(のどにエリンギがつかえてしまった。七十代の男性が食べては吐いてしまった)  
c. 一工作就肚子痛。 (ちょっと働いたら、腹痛に襲われる)  
d. 一喝就臉紅。 (飲んで顔が赤くなる)

また、中国語の“一”が持つ有界性機能はコトを個別化することと考えるには、もう一つ理由がある。それは、“一”を含む定名詞句は限界点としてコトの結果を表すということである。(16a)の“跑(走る)”だけではその行為に限界がないが、“一身汗”が付くことによって「走って汗だくになった」という結果を意味するようになる。結果というのは行為の到達点であるから、結果が含意されるということは、行為が有界ということである。つまり、“一身汗”は“跑(走る)”に限界点を付与し、“跑(走る)”という非限界的事象を有界的にするのである。このように、動詞に付く“一”(15)と“一”を含む定名詞句(16b)は、いずれも語彙レベルより大きなレベルで設定された、コトを具体化する限界付けと考えられる。本稿では、“一”は文レベルにおける事態の限界付けと考える。

- (16) a. \*他跑了。 (彼は走った)  
 b. 他跑了一身汗。 (彼は走った結果、汗だくになった)

中国語の“一”に当たる事態の限界付けの現象は日本語でも観察される(北原 1999)。(17)に見られるように、継続可能な非有界動詞「歩く」は期間副詞「30 分」とも期限副詞「30 分で」とも共起することができるが、数量詞句「2.5 キロ」を付けると、期限副詞「30 分で」としか共起できなくなる。北原(1999)によれば、これは数量詞句「2.5 キロ」が付くことによって、「歩く」に限界点が与えられ、有界的な事象として解釈されるようになったからである。

- (17) a. 太郎が{30 分/30 分で}舗道を歩いた。  
 b. 太郎が{\*30 分/30 分で}舗道を 2.5km 歩いた。

北原(1999)は日本語の事例を対象に考察を行った結果、日本語の有界性に複数の概念が存在すると指摘している。[+/-telic]のように、動詞の語彙的意味素性を静的な有界性システムとして捉えるもの以外に、(17b)のように有界性を文レベルにおける動的システムとして捉えるものもあることを提示している。本稿では北原(1999)の分析を参考にし、日本語の「一」と中国語“一”は単一的な有界性概念だけでは捉えられ

ないと主張し、それに代わる概念として日本語の「一」は「アスペクチュアルな限界付け」、中国語の“一”は「事態の限界付け」という多層的な有界性概念を提案する。以下の表にまとめたように、日本語の「一」はアスペクチュアルな意味素性として、語彙レベルで結合する要素が表す事象のアスペクチュアルな値を変更する。一方、中国語の“一”は事態の限界付けとして文レベルで付加されるものである。いわば工藤(1995)における「外的限界」に相当すると考えられる。“一”がコトに対して輪郭を与えることによって、そのコトは有界的、かつ具体的な「個体」として認識されるようになる。

|             | 適用レベル | タイプ  | 意味機能                                          |
|-------------|-------|------|-----------------------------------------------|
| 日本語の「一」の有界性 | 語彙レベル | 内的限界 | アスペクチュアルな素性として、結合する要素が表す事象のアスペクチュアルな値を変更する    |
| 中国語の“一”の有界性 | 文レベル  | 外的限界 | モノ・コトに輪郭を与えることで、そのモノ・コトが有界的かつ具体的な「個体」として認識される |

### 3. 考察と分析

本節では日本語の「ひと」と中国語の“一”に関わる事例を観察する。2 節で提案した「アスペクチュアルな限界付け」と「事態の限界付け」という多層的な有界性によって、日中両言語におけるより広範な事例を説明できることを示す。

#### 3.1 時間概念の含意の有無

日本語の「一」と中国語の“一”は、時間概念が含まれているかどうかにおいて違いが見られる。日本語では(18)の「朝餉前の一働き」、「フライト前の一遊び」、「買い物後の一休み」、「講習会指導後の一走り」、

「勤務前の一泳ぎ」などに見られるように、動詞と結合した「一」は時間表現と共起することができる。また、「一」が名詞と結合した場合においても、(19)に示すように、「お出かけ前」、「ゴルフの後」、「入浴前」といった時間表現は「一刷毛」、「一口」、「一汗」の発生時間が直接的に述べている。

- (18) a. 翌朝、彼が縁側でぼんやり佇んでみると、畑のなかを、朝餉前の一働きに、肥桶を担いでゆく兄の姿が見かけられた。  
 b. 那覇市内・那覇空港から近いのでフライト前の一遊びにも最適ですよ。  
 c. 豊富な種類のコーヒーなどお手頃価格のドリンクメニューを色々揃えていて、買い物の後の一休みに立ち寄るのにちょうどよかったです  
 d. ビギナーズ講習会指導後の一走り。  
 e. 勤務前の一泳ぎ。
- (19) a. 化粧崩れやテカリにくくする効果もあり、お出かけ前の一刷毛に最適です。  
 b. ゴルフの後の一口がたまりません。  
 c. 観光客が入浴前の一汗としてテニス等に勤しむ。

一方、中国語の“一”は日本語の「一」とは異なり、時間表現と共起することができない。(20)に示すように“上班前的一跑”や“早餐前的一工作”、“飯後的一休息”などは中国語では意味をなさない。名詞に付く“一”でも、(21)の「出門前的一刷子」、「高爾夫之後的一口」、「睡前的一口」などのように、文として不適格である。中国語の“一”は時間表現と共起できないことが明らかである。

- (20) a. \*上班前的一跑。 (出勤前の一走り)  
 b. \*早餐前的一工作。 (朝餉前の一働き)  
 c. \*飯後的一休息。 (食事の後の一休み)
- (21) a. \*出門前的一刷子。 (出かける前の一刷毛)  
 b. \*高爾夫之後的一口。 (ゴルフの後の一口)

c. \*睡眠的一口。 (寝る前の一口)

これらの言語事実は、本稿が提案した多層的な有界性から予測することが可能である。中国語の“一”が持つ有界性は、あくまでも外的限界付けとしてコトに対して明確な輪郭を与え、コトを個体化するだけである。ほかの出来事とは時間的に一切関係ない。よって、中国語の“一”は時間表現とは共起しない。一方、日本語の「一」は語彙的アスペクト素性として、結合する要素に含意されるコトの展開における区切れを表す。そこで、「買い物後の一休み」や「お出かけ前の一刷毛」のようにほかの出来事と時間上の継起関係を成すことができ、時間表現と結合することが可能である。

3. 2 意味解釈の違い：集合体解釈か個体解釈か

日本語の「一」と中国語の“一”が同じ名詞と結合しても、以下に示すように、中日語の間で意味解釈の違いが見られる。(22a)に示すように、日本語の「一足」は駅までの距離という意味であるが、中国語の“一腳”にはその解釈はない。逆に、(23a)の“踢了一腳”に対応する日本語「一足蹴る」は文として不適格であるが、その中国語に不自然なところはない。本節ではこれらの問題をきっかけに、本稿が提案した多層的な有界性によって日中両言語における「一」の意味解釈の違いを説明する。

(22) a. 駅まではもう一足だ。

b. \*離車站只要再一腳。

(23) a. 花子踢了太郎一腳。

b. \*花子は太郎を一足蹴った。

まず、日本語の「一」は仕切りとして、事象の展開過程が尽き果て、それ以上に展開することができないことを表す。結合する要素の性質によって「一」が表す幅の値はいろいろであるが、いずれにせよ「一」は境界領域を持つ集合体として存在し、その中に複数の回が含まれる可能性がある。たとえば、(24a)「一風呂」は「一回風呂を浴びてくる」、「二回風呂を浴びてくる」という表現の「一回」、「二回」とは異なる。「一回風呂を浴びてくる」は文字通りのその回数を意味するが、「一風呂」は「一

まとまりの事象」を表し、その事象は必ずしも一回的に完結した可算可能な行為として把握されるわけではない。(24b)の「一雨」も雨が降るという始まりがあって終わりがあるという過程を示し、一まとまりの事象を表す。(24)の例文は名詞に付く「一」は境界領域を持つ集合体として認知されていることを示している。

- (24) a. 一風呂を浴びてくる。  
b. 一雨降ったあとに青空がひろがりました。

また、動詞に「一」が付く場合においても、「一」は事象を集合体として捉えている。(25)の「一泳ぎ」、「一走り」のように継続動詞と結合する場合に、「一」は均質に展開する一まとまりの事象を意味する。(26)の「一潰し」のように状態変化動詞と結合する場合に、「一」は「潰す」が表す事象における限界点に至る過程の一部を表す。「叩く」のような一回相動詞に「一」が付く場合でも、(27)に示すように、動作が複数回行われるという一まとまりの解釈が可能である<sup>6</sup>。

- (25) a. 軽いカゼの引き初めは熱いウドンを一杯すするか、その辺を一走りして汗をかけば治るかもしれないが、軽いと思っていたカゼがそうではなくて、こじらせて肺炎にならないとも限らない。  
(9a 再掲)  
b. 家の庭にプールがあったら、一泳ぎしてから出社したり、暑い時ザブンと飛び込んでから眠ったりできるな。  
(9d 再掲)  
(26) ゆでたじゃがいもを軽く一潰しした。  
(10a 再掲)  
(27) 肩こりを直すため、肩を一叩きしてもらった。(由本等 2015:435)

要するに、日本語において「一」の意味解釈は、山梨(1995)が言う統合的認知に相当すると考えられる。「一」は複数の個体から成る集合に対する巨視的視点である。(28)の図に示すように、「一」はその集合メンバ

<sup>6</sup> 一回相動詞とは「蹴る」、「叩く」など、その動作が一回で終了する動詞のことである。

一の個別性を捨象し、事象全体を集合体として捉えているのである。

(28) 「一」の意味解釈：統合的認知



「一」において、場合によって個別の集合メンバーに注目することが可能である。(29)の「次の一足」や「最後の一口」がその例である。それは、(30)の図に示す離散的認知に対応すると考えられる。しかし、ここにおいても「一」が持つ集合体が前提として存在するので、「駅まであと一足」における「一足」は限界点に至る過程の一部として「一歩」や「30メートル」など具体的な距離に置き換えられる。「一足」は単発の動作として足を一回動かすという意味にはならない。

(29) a. 一足、そして次の一足を大切に前進していく。

b. スターはいちごのスムージーの最後の一口を飲んだ。

(30) 「一」の意味解釈：離散的認知



「一」は(31)に示すように「～ずつ」、「～ごと」や「重ね型」などの表現と共起しやすいのもそのためである。「～ごと」、「～ずつ」や「重ね型」などの表現は、話し手が認知の焦点を時間軸に沿って動かすことによって、動作が複数回行われる含意が与えられる表現である。これらの表現は「一」と同様にまとまりのある全体が強調されるので、共起しやすい。

(31) a. まず感じるのはその肉質の柔らかさ、そして肉の旨み、脂の旨みが一噛みごとにジュワー。

- b. 夜の焚火で焼いたそのイワナを、一行九人は一かじりずつまわして食べた。
- c. 一かきするごとに肌を滑って、肌はますます桃色につややぐようだ。その泳ぐ私を、夢でも見ているように、私は見えていた。
- d. 貰った時はすごく嬉しかったけど…完成までにかかった時間・労力を考えたら急に恐ろしくなってきました。なんか、二縫い一縫いに念が籠もっていそうで…自分が昔編んだマフラーが捨てられると思ったらかなり悲しいです。

一方、中国語の“一”は外的限界として、コトに明確な輪郭を与える機能を持つ。“踢一脚(一回蹴る)”、“看一眼(ちょっと見る)”、“打一巴掌(ビンタする)”、“抽一鞭子(鞭で叩く)”、“打一拳(拳で一回殴る)”などに示すように、“一脚”、“一眼”、“一巴掌”、“一鞭子”、“一拳”が付くことによって動詞が表すコトに個別の輪郭が与えられ、コトが個別化される。このように中国語話者がコトを認識する際に用いられる“一”の有界性機能(“踢一脚”)は、2節で述べた、大河内(1997)が指摘した個体化機能と一貫していると考えられる。モノの認識に対する“一”の個体化機能とは、名詞に個別の概念を与え、抽象的なモノを具体化するという機能である(大河内 1997)。“水”と“一杯水”がその例である。“一”が持つ個別化・実体化機能は中国語話者がコトに対する認識する際にも働いている。(32)に示すように、「一」が付くことによって、“一口”、“一鞭子”、“一槍”などは事象が明確な輪郭を持つ「個体」として認識され、“吃了两口”、“抽兩鞭子”、“開了三槍”のようにコトそのものが数えられるようになる。

- (32) a. 吃了一口。 (一口食べた)  
 b. 抽一鞭子。 (鞭で一回叩く)  
 c. 朝他開了一槍。 (彼に向かって拳銃を一発撃った)

以上の議論をまとめると、名詞または動詞と結合する場合、「一刷毛塗る」や「一泳ぎする」に見られるように、日本語の「一」はアスペクト素性として事象の展開における仕切りを示し、「一」は、結合要素が表す事

象のアスペクチュアルな範囲を表し、境界領域を持つ集合体をなしている。一方、中国語の“一”は結合要素が表す事象に輪郭を与えて、コトを個別化・具体化する機能を持つ。中国語話者がモノを認識する際に用いられる“一”の個別化機能(“一桶水”/“兩桶水”)は、話者のコトに対する認識パターン(“踢一脚”/“踢兩腳”)にも働いている。よって、(33)の“一脚”に見られる個別化された特定なコトという意味解釈は、日本語の「一足」にはない。逆に、(34)の「一足」は「一温め」、「一冷やし」などと同様に、限界点に至る過程の一部が測り取られるという意味解釈は、中国語の“一脚”にはない。このように、日中両言語における意味の違いは、本稿が提案した「アスペクチュアルな限界付け」と「事態の限界付け」により、統一的な説明が与えられることを示した。

- (33) a. 花子踢了太郎一脚。  
b. \*花子は太郎を一足蹴った。
- (34) a. 駅まではあと一足だ。  
b. \*離車站只要再一脚。

#### 4. まとめ

日中両言語において、日本語の「一」と中国語の“一”は付加する要素に有界性を付与するマーカーとして認識されているが、本稿では、様々な言語事実を考察することによって「一」と“一”における有界性の違いを裏付けた。本稿が提案した「アスペクチュアルな限界付け」と「事態の限界付け」という多層的な有界性の導入により、日本語の「一」は結合する要素が語彙的に含まれるアスペクチュアルな値を変更する役割を果たしているが、中国語の“一”はモノ・コトを個として捉えることでモノ・コトを有界化する働きをすることを示した。

Pustejovsky (1995) では、世界中の言語は基本「制限付き単一形態複数解釈型の言語 (weakly polymorphic languages)」に属する。すなわち、単一形態が何らかの制限内で複数の意味と対応する。本稿で扱った日本語の「一」と中国語の“一”はまさにその語彙のダイナミックな側面が見られる興味深い現象である。日本語の「一」も中国語の“一”も有界性を

表すマーカーであるにもかかわらず、「一」はアスペクチュアルな有界を表すのに対して、“一”は個体概念としての輪郭を表すという言語間の違いが見られる。ただし、本稿で扱ったのは、日本語の「一」または中国語の“一”に関わる現象のうちのごく一部である。今後は本稿をさらに発展させ、結合可能な名詞における語種選択、具体的にどんな名詞が「一」または“一”と結合可能なのか、「一」と“一”の統語位置によって意味解釈に変化をもたらすか、という問題を明らかにしていきたい。

#### 参考文献

##### 中国語文献

- 古川裕(1997),〈談現象句與雙賓語句的認知特點〉,《漢語學習》第1期,頁265-287。
- 沈家煊(1995),〈“有界”與“無界”〉,《中国語文》第5期,頁67-79。
- 沈家煊(2004),〈再談“有界”與“無界”〉,《語言學論叢》第30期,頁123-235。

##### 日本語文献

- 池上嘉彦(1981),《「する」と「なる」の言語学》,東京:大修館書店。
- 池上嘉彦(1982),〈表現構造の比較—〈スル〉的な言語と〈ナル〉的な言語—〉,《日英語比較講座第4巻 発想と表現》,東京:大修館書店。
- 池上嘉彦(1989),〈『名詞的』なものと『動詞的』なもの〉,《言語》第18期,頁44-49。
- 池上嘉彦(1995),《「英文法」を考える—「文法」と「コミュニケーション」の間》,東京:ちくま学芸文庫。
- 石田秀雄(2002),《わかりやすい英語冠詞講義》,東京:大修館書店。
- 岩田一成(2013),《日本語数量詞の諸相—数量詞は数を表すコトバか》,くろしお出版。
- 王蓓淳(2019),〈事態叙述の観点から見た「イチ+名詞」と「ひと+名詞」—中国語との対照を中心に—〉,《比較文化研究》第136期,頁183-191。
- 大河内康憲(1985),〈詞の個体化機能〉,《中国語の諸相》,日本中国語学会,頁53-74。

- 影山太郎(1996),《動詞意味論-言語と認知の接点》,東京:くろしお出版。
- 北原博雄(1999),〈日本語における動詞句の限界性の決定要因—対格名詞句が存在する動詞句のアスペクト論—〉,黒田成幸・中村捷編《言葉の核と周縁—日本語と英語の間》,東京:くろしお出版。
- 工藤真由美(1995),《アスペクト・テンス体系とテクスト—現代日本語の時間の表現》,東京:ひつじ書房。
- 中川正之・李浚哲(1992),《日中両国における数量表現》,大河内康憲編《日本語と中国語の対照研究論文集》,東京:くろしお出版。
- 山梨正明(1995),《認知文法論》,東京:ひつじ書房。
- 由本陽子,伊藤たかね,杉岡洋子(2015),〈「ひとつまみ」と「ひと刷毛」—モノとコトを測る「ひと」の機能—〉,《語彙意味論の新たな可能性を探って》,東京:開拓社,頁 432-462。

#### 英語文献

- Jackendoff, Ray.(1990) *Semantic Structures*. MIT Press.
- Jackendoff, Ray.(1997) *The Architecture of the Language Faculty*. MIT Press.
- Kageyama,Taro(2001)“Polymorphism and Boundedness in Event/Entity Nominalisation”*Journal of Japanese Linguistics* 17, pp.29-57.
- Levin,Beth.(1993) *English Verb Classes and Alternations*. The University of Chicago Press.
- Levin,Beth and Tova R.Rapoport.(1988)“Lexical Subordination,”*CLS* 24:275-289.
- Pustejovsky, James.(1991)“The Syntax of Event Structure,” *Cognition* 41:47-81.
- Pustejovsky, James.(1995) *The Generative Lexicon*. MIT Press.

本論文於 2020 年 3 月 18 日到稿,2020 年 5 月 18 日通過審查。